



中村 悟
M&Aキャピタルパートナーズ
取締役社長



湯川 智子
サピエント
取締役社長

警 鐘

私たち夫婦が住む東京都港区芝浦アイランドの管理組合において、最近激論が交わされ続け、私たちは少々変わった夫婦だと思われています。それというのも、過去に理事会で廃止と決定され、国も廃止を強く推奨している“定期的農薬散布”の復活に反対したことに端を発しています。

レイチェル・カーソンの『沈黙の春』(新潮文庫)は、DDT^{*}使用により汚染された虫を食べた鳥たちが死に絶えて春になっても鳥の声が聞こえない^{ぐうわ}寓話を織り交ぜ、環境汚染に警鐘を鳴らしました。この薬品自体はもう使われなくなりましたが、人間が原因の恐ろしい自然現象は今でも起こっています。

また、少し前のベストセラーであるローワン・ジェイコブセン『ハチはなぜ大量死したのか』(文春文庫)では、農作物の受粉に必須であるミツバチの大量失踪が世界中で報告され、近い将来、農業への大打撃が推測されています。

「2007年の春、地球上の4分の1のミツバチが消えた」という事件の重大さにもっと気が付くべきでしょう。今でさえ、ミツバチの大量失踪=蜂群崩壊症候群は続いているのですから。

本書ではその原因として、電磁波・遺伝子組み換え・ウイルス感染の諸説が挙げられています。しかしそれぞれに反証があり、犯人像はなかなか特定できません。自らの都合で自然界に介入を続けた人間に対して、もの言わぬミツバチが告発をしているように思えてきます。

人間が作り上げた農作物は単一種になる傾向が強く、「自然からの反撃」には極めて脆弱^{ぜいじやく}で、変異ウイルスや、農薬に対する高度耐性の昆虫の出現による壊滅的被害が危惧されています。例として北米への大量移民の引き金となった、1845年ごろのアイランドのジャガイモ飢饉^{ききん}がよく知られています。

自然界の教訓は、里山を切り崩したために熊や鹿や猿たちの居場所を奪い、その結果、人間の暮らしや安全を脅かすことにも及んでいます。自分たちの都合を軸に、単一的な発想で物事を進めていくと、いつかしつぺ返しが来るのは自然と歴史が証明しています。

多様性を重んじるべきは、日本の経済界の一部にも通じるのではないのでしょうか。

※有機塩素系の殺虫剤・農薬